

# 山田 尚（やまだ・しょう）

## 1、プロフィール

詩人・詩論家として、60年代以降の青森県の詩壇をリードした。また、高木恭造研究の第一人者であり、「詩文集」全3巻を編纂。方言詩の朗読の名手でもある。詩誌「亜土」主宰。

<生没>

1935(昭和10)年3月11日～2024(令和6年)1月12日

<代表作>

詩集『北のまほろば』

評論『「まるめろ論」—高木恭造の青春』

<青森との関わり>

大鰐町出身。詩誌「亜土」主宰。高木恭造研究の第一人者。弘前市立郷土文学館専門員を務めた。

## 2、作家解説

1935年3月11日、父久雄・母ツエの六男として生まれる。父は営林署に勤めていた。大鰐国民学校卒業後、大鰐中学に進むが、2年より弘前大学付属弘前中学に編入学。弘前高等学校に進む。文芸部に所属。また、13歳のころよりチェロを弾き始め、高校時代は弦楽四重奏に熱中していた。長部日出雄、獺不次男等と同窓。

父の死去のため進学を断念。青森の教員養成所に進み小学校教員となる。大鰐町及び弘前市の小学校を歴任し、1994年、弘前市立豊田小学校副校長で定年退職する。

高校時代より詩を志し、川村欽吾より直接指導を受ける。「荒地」派の詩人たちに強い影響を受け、四季派的抒情を否定する戦後詩の土壌を自らの詩業の出発点とした。1965年第一詩集『北辺の樹』を刊行。この年、泉谷明と詩誌「亜土」を

創刊する。以降、戦後現代詩の詩人・詩論家として、青森県の詩壇をリードし続けた。また、一戸謙三、高木恭造、福士幸次郎、斎藤吉彦等の評伝を、新聞紙上に連載。青森県の先人詩人の研究者としても多くの仕事を遺した。特に、高木恭造の研究においては第一人者であり、その全集といえる『高木恭造詩文集』全三巻（津軽書房）の編纂をした。また、方言詩の朗読においても、作品に対する理解の深さにおいて他の追隨を許さない。

1996（平成 8）年から 7 年間にわたり弘前市立郷土文学館の専門員となり、主に津軽出身の文学者の資料収集と紹介に業績を遺した。その仕事の質・量・領域において、昭和から平成にかけての青森県の詩壇に、最も大きな影響を与えた一人である。

主な著書として、詩集『北辺の樹』（青森県詩人協会 1965）、『リュリュの岸辺』（津軽書房 1973）、『冬の輪』（津軽書房 1983）、『北のまほろば』（亜土詩会 1995）。評論『「まるめろ」論—高木恭造の青春』（津軽書房 1979）、『一戸謙三・詩の軌跡』（一戸謙三詩碑建立の会 1997）。朗読 CD『高木恭造「まるめろ」—生誕 100 年記念』（亜土詩会 2003）などがある。

### 3、資料紹介

#### ○詩集『北のまほろば』

著者 4 冊目の詩集。四季派的抒情を否定することから出発した著者のひとつの到達点。過去と宇宙と死が私の心象を交差する。硬質な抒情はいぶし銀のように鈍く輝く。